

海運の重要性を学校教育の場で
～川崎市にて海事施設の見学会を実施～

当協会は、日本の暮らしと産業を支える海運をはじめとする海事産業の重要性を学校教育において取り上げていただくよう、教育関係者に対し海事施設等の見学会や授業への協力、資料提供等を実施しております。

2 月 25 日（火）、世田谷区立砧南小学校の 5 年生約 200 名を対象に、自動車工場の見学に合わせた自動車船ターミナル見学会を実施しました。本見学会は、関東運輸局の主催により、商船三井の協力を得て開催されました。その様子をお知らせします。

当日は、午前と午後の部夫々約 100 名ずつに分かれ、①川崎マリエン内にある会議室で講義を受けた後、②バスで自動車船ターミナル（以下ターミナル）に移動し、ターミナル構内で荷役作業をしている自動車船を見学しました。

① 川崎マリエンでの講義

川崎マリエン到着後、まずは会議室で商船三井の航海士から講義を受けました。

講義では、はじめに船員の仕事について説明があり、船上の船員は甲板部、機関部、司厨部の 3 部署に分かれて仕事をしていることや、航海士は「ワッチ」と呼ばれる 4 時間交代のシフトで勤務していること、袖章の本数が職位によって異なることなどが紹介されました。



講義の様子



袖章の本数について説明する様子

船上での生活や食事についても写真を交えながら紹介され、船上から見える星空や、司厨士の作る寿司や豚の丸焼きの写真をみた児童たちからは驚きの声があがりました。

次に、当日見学をする「自動車船」について説明があり、他の船種と比べて自動車船は全長 200m と短く造られている理由として、様々な港に入りやすいという利点があることを学びました。また、自動車船の中は立体駐車場のよう構造になっており、ランプウェイ（船と岸壁とをつなぐ傾斜路）を通過して自動車が船に積まれていくことや、自動車の積み付けはチームごとに行われ、3 チームで一日 1,500 台の自動車を積むことが説明され、児童は熱心にメモを取りながら説明

を聞いていました。



講義を聞いて熱心にメモを取る児童



航海士に直接質問をする児童

② バスでターミナル構内を見学

川崎マリエンで船員の仕事や自動車船について学んだ後は、クラスごとにバスに乗車して、自動車船の着岸しているターミナルへ向かい、車内から荷役の様子を見学しました。積み付け作業員は、船内で安全に荷役を行うべく、旗を持った作業員の合図に従い、チームごとに隊列を組んで自動車を運転し、スムーズに船内に積み込んでいました。



自動車船の荷役の様子



自動車船の荷役の様子を説明

見学中は、バス車内で質疑応答の時間が設けられ、児童たちは同乗する航海士の方に、時間が足りなくなるほど活発に質問をしていました。

「船員をやっていてやりがいを感じるのはどんな時か」という児童からの質問に、「船も荷物もとてもお金のかかっている財産であり、船員はその財産を運んでいる。それを守っていることにやりがいを感じる」と語っていたのが印象的でした。他にも、「船一隻はいくらか」「自動車船を満載にするにはどれくらいの時間がかかるか」「ターミナルにとまっている自動車は潮風でさびないのか」「一番入港が難しい港はどこか」「海上でどこにいるか分かるのか」「船にパナマの国旗が立っているのはなぜか」「一隻の船を造るのにどれくらい時間がかかるか」など様々な質問が挙がりました。

か」「一番入港が難しい港はどこか」「海上でどこにいるか分かるのか」「船にパナマの国旗が立っているのはなぜか」「一隻の船を造るのにどれくらい時間がかかるか」など様々な質問が挙がりました。

その他にも「船員さんにも夏休みはあるのか」「船上でもゲームはできるのか」「ワッチ勤務中、目は疲れないのか」「家族に会えなくて寂しくないか」「船酔いはするか」「お風呂は海水か」「一等航海士になるまでに何年かかるか」「曜日感覚はうすくなるか」といった素朴な疑問が多数出て、児童は航海士の仕事や、船上での生活に興味を持った様子でした。



ターミナルに整然と並べられた自動車



約 10 人の作業員で 1 チームとなり、積み込みを行う

当協会は引き続き、会員会社や海事関連企業などと連携しながら、海事産業をより教育に取り上げてもらえるよう広報活動に注力してまいります。

以上